考古学からみた近世港湾都市長崎の発達過程

田中　学

はじめに

元亀二年（一五七一）とされる町建てを起点として、近世都市長崎がどのように発達したのか、いま考える限り妥当な見解を述べるのが本稿の目的である。

整理する観点としては、まず第一点に考古学的な見地に立つことである。筆者が歴史考古学（日本）を専門とするのも主な理由であるが、町建て当時の同時代的文献が失われている現状をみると、同時代の遺構等が土地に直接記録されている考古資料をみるのがより正確であると考えるからである。

つぎに第二点として、港湾、すなわち貨物や人の出入りがあった海岸がどのような姿態をなしていたかという地形的な見地[1]に立つことである。ヴィエイラ・アマロが指摘したとおり、「西欧と日本の商人、宣教師、そして西九州の大名は港市の計画においてそれぞれにどのような役割を果たしたか」、「一五七一年[2]の港市の計画に当たり、最初に建設されたのはいわゆる六丁町のみだったのか、あるいは他の町も同時に建てられていたのか」という問いには、「いまだに明確な答えが与えられていない」（ヴィエイラ・アマロ二〇一六）。これには海岸地形の復元だけでなく、更に進めて、より具体的に波止場施設の位置や町との関係を考察する必要を感じるからである。

最後に第三点として、斯界において今や大きな位置を占める「港市論」（安野眞幸一九九二）から少し距離を置きたい。貿易と対外関係そして人類学的な社会比較の色彩が強い本論から出発すると、抽象化が進んでしまって具象を失うこともあるからである。

なお、本稿においては、現在の長崎市の行政区分における町名と、江戸期以前の長崎市中の町名が頻出する。同じ「●●町」で呼ばれる町名もあるため、これ以降、本稿では引用文を除き、現在の町名は「●●町」、江戸期以前の町名は「旧、●●町」と呼称することとする。また、江戸期以前には存在したが現在残っていない町名については煩雑を避けるため、時期の区別が判断しがたい場合以外は「旧、」を省略して「▲▲町」と呼称することとする。

一　先行研究と問題の所在

（一）関係する先行研究

先に挙げた観点を導くため、まず先行研究を瞥見して、問題の所在と用語の整理を行いたい。先行研究は、文献史、建築史、考古学の三者に大きく分かれる。

文献史から

文献史においては、ディエゴ・パチェコ（結城了悟）、安野眞幸、越中哲也、外山幹夫の成果がある。結城はコスメ・デ・トーレス神父の足跡を中心に辿るなか、島原と大村を結ぶ陸の布教経路のなかで長崎が注目され、一五六七年以降、修道士が訪問したことを記している。また、ポルトガル船の入津に必要な、長崎湾の本格的な測量が一五七〇年八月～十月末になされた点を指摘した（パチェコ一九六九）。

安野は、大村・竜造寺の領主間の勢力均衡のなかで、住民の有力者たちが運営する「自治都市」として長崎が発展したこと、天正八

年（一五八〇）のイエズス会への寄進まではキリシタンの町ではなかったことを指摘した。また、同年の教会領長崎の全体は、堀と石垣に囲まれた「環濠城塞都市」となっており、都市の拡大・発展につれて堀も外へ作られたこと、教会と六町は離れて更に要塞のようになっていたことなどを挙げた（安野一九七四）。

本稿では、このとき長崎の町を「地域区分」して図示したことに注目したい。目視できるようにしたことに加え、図によって区分した地域を「歴史的な単位」として、Ⅰ：（森崎権現―）岬の教会（―長崎奉行所西役所）、Ⅱ：六町、Ⅲ：のちの「内町」、Ⅳ：岬の高台と海との間の海岸地帯というゾーニングを説明したことは画期的と考える。

その後、安野は前論文をもとに『港市論』をまとめるに至るが、ここで大きくゾーニングを変化させた。それは、「Ⅲ」地域に位置させた旧、樺島町や五島町などが「Ⅱ」の六町同様、町建て当初から存在したと推定した点である。また、「Ⅴ」地域として「大波止」を「岬の高台と海との間の海岸」に限定した。そして、Ⅲ地域から「現在の桜町」などの「内町」の最北端部を抽出し「Ⅳ」地域とした（安野前掲）。

ここには思考の大きな転換がある。安野は「通説と異なり、都市長崎は現在の日本の都市と同様、都市領域が明確化されることなく、スプロール現象を伴いつつ、成立・発展していったと見る」ようになったためである。安野の批判する通説とは以下のとおりである。

「一、都市長崎は「堀」や「石垣」で囲まれ、西欧の中世都市と同様、都市の内部と外部は明確に区別されていた。

二、それゆえ、中世都市長崎は西欧都市と同じだ。

三、「内町」「外町」ができるのは江戸時代以降で、このとき以来、都市長崎は日本的な都市に変身した。」

加えて言うと、これは、「交通形態」や「世界史の基本法則」を重視した日本のマルクス主義歴史学が「鎖国」的「一国主義」的な立場に立ち、「市民社会」を無視してきたという歴史哲学が反映された解釈の変更である。[3]

越中は、現、岩原川河口の「舟津」が長崎の港であり、大波止よりも古い船着場と考えた。また、舟津（筑後町）→ござ町（八百屋町）→「天神川路」→長崎氏本拠（桜馬場）への陸路を古道として重視した。このほか、江戸町の成立は一六〇一年以降ではないかとの見解を述べている（越中一九八四）。

外山は、日本側の文献を主に分析し、西欧の文献資料を宣教師たちの作為が入っているものとして余り重視しない立場を取った。そのため、町建て当時の居住者が全て逃亡したキリシタンであるという見解を疑問視し、大村・島原町の居住者は領主から移住を命じられたと考えている。また、元亀元年（一五七〇）の「長崎開港」はポルトガル船の入津を指すものであり、それ以前から長崎には唐船の往来があったこと、考古学的調査から中世の五輪塔や土葬墓、輸入陶磁器が出土したことなどを指摘し、元亀元年・同二年にのみ注視して「開港」と呼ぶことには偏重があると批判もしている（外山二〇一一、一三）。

建築史から

建築史においては長崎を個別に扱った事例は少ない。早い事例としては、小林英之が一九八二年の長崎大水害の緊急調査で得た経験から、防災というユニークな観点で長崎の都市域の拡大を述べている。ここでは「住宅地開発は、大きく見て、洪積段丘面（安全な立地）→氾濫原・埋立地（浸水の危険）→傾斜地（崩落の危険）の順

で進んだ。」と土地条件図を用いて説明した（小林一九八八）。

また、近年では、ベビオ・ヴィエイラ・アマロが地形データ（国土交通省国土地理院提供の現代の標高データ、ボーリングデータ、埋蔵文化財発掘調査報告書、明治時代の水底測深図）をもとに、一七世紀前後の長崎の海岸線の復元（満潮・干潮）を行った。既往の研究が当時の海岸線がどのようなものか、すなわち江戸期とそれ以前の長崎の地形や町割の差異を等閑視する、あるいは混同して論じていたのに対し、最も正確な土地形状を考察した点で重要である。例えば、彼も指摘するように、一五六九年の地形復元図によれば中島川の河床はそれほど深くなく、河口は現在の賑町～万屋町あたりに開いていて、時に巷間に言われるような、長崎氏の居城（桜馬場）方面まで入江が湾入したというものではなかった。このほか、外国語文献を直接読むことで「開発最初期における六丁町以外の町の存在は疑わしい」とし、「可能性としてありうるのは、（横瀬浦町、ぶんち町にそれぞれ隣接した）樺島町と下町のみである」と結論づけた（ヴィエイラ・アマロ前掲）。

建築史のもう一つの観点として、町割りの主軸方向を分析するものがある。これについては、宮本雅明が「日本型港町」という都市類型の提唱を行うなか長崎を扱っている。宮本は、城下町の分析で用いられる道路の主軸を利用することで、船着き場から内陸に向かう街道に沿ってタテ町型の町割をなすのが中世起源の港町であるとした。一方、「水陸線に並行する通りの両側に町屋が展開する」、つまり船着き場の所在する海岸（河岸）に沿った町並みが、近世の港町の特色であるとした。

宮本は、安野の港市論に大きく共鳴したようであり、安野も依拠したカール・ポランニーの交易システムを引用して、特定の窓口を介して交易が行われる「間接交易」のうち、窓口の管理者によって商品の価格が決定される「管理交易」と、価格が市場原理で決定される「市場交易」の区別を紹介したうえで、中世起源のタテ町型の港町は前者、海岸に沿った町並みの港町は後者であり、前者から後者の展開を導いた。このとき、長崎はイエズス会→豊臣政権→徳川政権を通じて、管理交易の町として例示されている（宮本二〇〇六）。

考古学から

考古学においては、宮﨑貴夫、川口洋平、坂井隆が所論を述べている。宮﨑は自身が中心となって取り組んだ万才町遺跡（旧県庁新別館地点）の埋蔵文化財発掘調査報告書（長崎県教育委員会一九九五）以来、資料の再検討を続け、近年も、遺構の配置と正徳年間（一七一一～一六）の町絵図を対照するほか（宮﨑二〇二〇a）、長崎の町域の変遷過程をモデル図によって提示するなど（宮﨑二〇二〇b）、研究を深化させている。

川口も、宮﨑と同じく万才町遺跡（旧県庁新別館地点）の資料を中心に研究を行い、近年は「a．文献史学　b．歴史地理学　c．考古学」の各分野の成果を有機的に結びつけることを目的に、一七世紀初頭の火災（一六〇一、〇二年に罹災）の前後の遺構・遺物を比較して「長崎奉行が任命される慶長八年（一六〇三）を境に大きく変貌する」と結論した。これには「朱印船貿易などによって各地から資本が流入することにより、単なる「窓口としての港」から「商取引の場としての貿易港市」へと都市の性格が変化したことがうかがえる。」という背景を考えている（川口二〇〇四）。

坂井隆は、東南アジアの中近世都市を「港市」「政治宗教都市」と定義して、ヨーロッパ人来航前後の変化や、ヨーロッパ人が建設した東南アジアの都市や、日本や那覇の中近世都市を比較した。こ

こにおいて長崎は、「内町（奉行支配）と外町（代官支配）の機能は、前者が政治的でオランダ・ポルトガル貿易と関係が深く、後者は市場的で中国貿易に密接に結びついている。両者による二重機能が並立しており、そして内町には東南アジアの西欧要塞類型（斜体ママ、筆者註）様相がある。」と位置付けられている（坂井一九九五）。

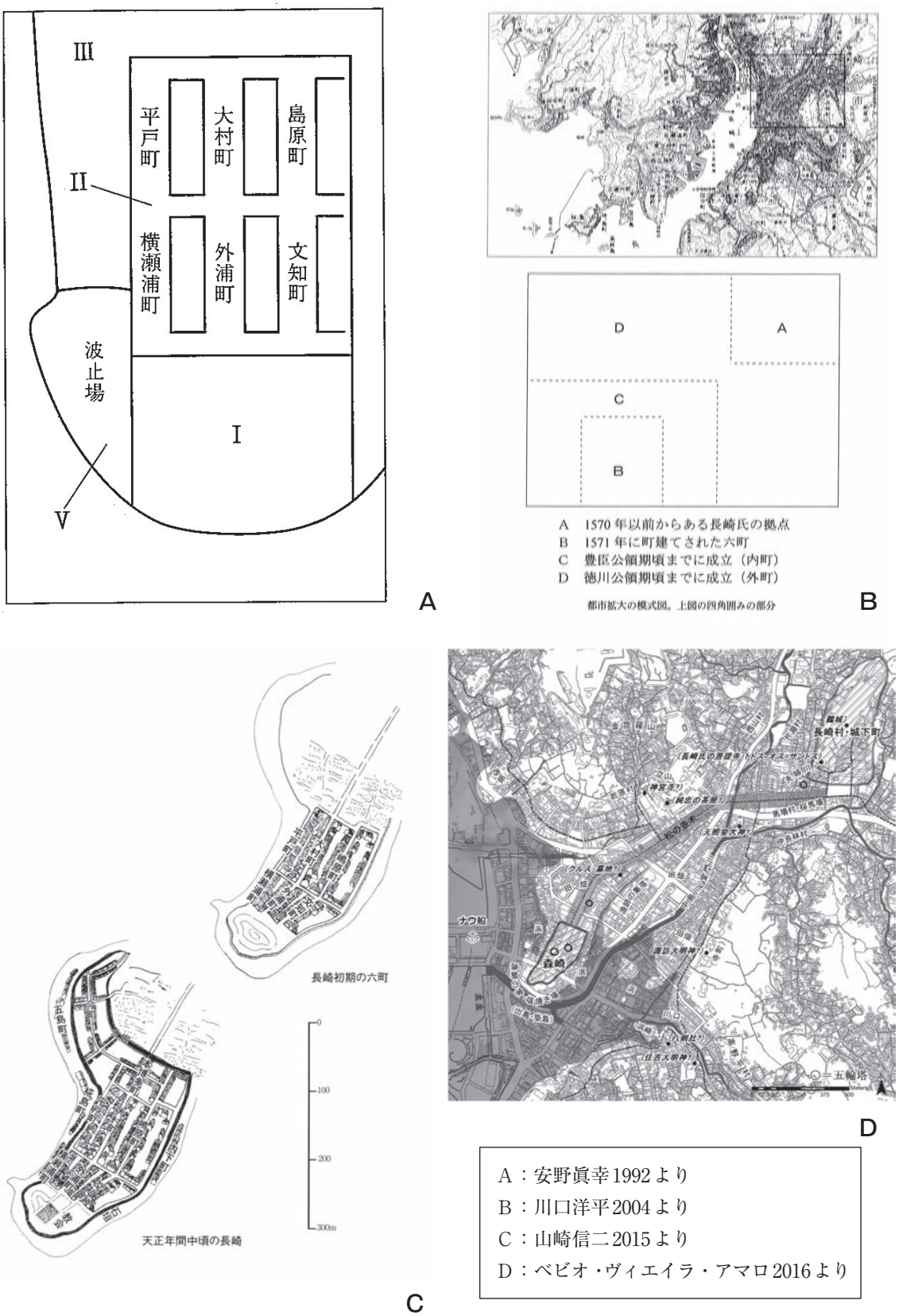
（二）問題の所在

先行研究を概観するなか大きな問題として感じるのは、町建てから徳川公領期に至るまでの約三〇年間（一五七一～一六〇三）において、長崎は市域を大きく変化させたにもかかわらず、地形、とくに海岸の変化について注意を払った論考はほとんどないことである。長崎の外縁を規定する重要な要素であるにもかかわらず、海岸は概念図によって示され、抽象化されるか単純に省略されすぎていた（図1）。ヴィエイラ・アマロは「長崎は埋め立てによってその地形、特に海岸線のかたちを大きく変えたが、方法的限界からその一体的な復元はこれまで行われていない。」と研究の現状を指摘したうえで、「港湾都市一般の成立過程は、それらの水陸をまたぐ物理的・地政学的条件を読み解くなかでこそ、より合理的に理解される」と述べた（ヴィエイラ・アマロ前掲）。筆者も同意見である。

つぎに、物資や人が運ばれる起点である、港の場所や形態は変化するのか否かという分析にも不足を感じる。岩原川河口の港（船津）と大波止の2つのうち、前者が後者より先行する（越中前掲）、両者の時間差は特に考慮しないで中国貿易港／ポルトガル・オランダ貿易港と二元的な位置づけを与える（坂井前掲）など、理解に曖昧なところがある。また、大波止の位置は当初から変化していないのか。ヴィエイラ・アマロの地形復元図をみると、一六世紀末の海岸線の形状は樺島町へ大きく入り組む一方、江戸町へは陸地が出ており居住地が存在したかのようである。なお、越中哲也は江戸町の成立をもっと遅く措定している。

こうした問題は、近年ほとんどの研究が安野眞幸の「港市論」に依拠あるいは影響されて書かれたことに起因している。安野にとって分析の主眼はゾーニングの位置と、ゾーンの主体者が誰かであり、ゾーンの主体者間あるいは、主体者と両ゾーンの掌握者となる政権との相克が主題であった。しかし、都市域の拡大を図式的に復元した結果、地形に代表される居住区域の差異や実態を捨象してしまった。そのうえで、イエズス会／長崎町衆、内町／外町、都市域内／外、宗教／貿易、…、などの二元論へ昇華するのは、安野の意図とは全く逆に、別の「世界史の基本法則」を導入することにならないか。その結果、長崎を「港市」というシェーマに当て嵌める陥穽に落ちることを恐れる。

もう少し具体的に言うと、「港市論」の出発点は東南アジアを対象とした研究であるが、遡航も可能な大河を運河にして域内に取り込んで成長した東南アジアの都市と、遡航困難な河川が多い日本のそれとで直接比較ができるであろうか。一国主義と言われても、まずは正確を期すためにも、長崎の地形それから港の位置の事実確認から、考察を深める必要があろう。



A：安野眞幸1992より
B：川口洋平2004より
C：山崎信二2015より
D：ベビオ・ヴィエイラ・アマロ2016より

図１　諸論考に図示された、町建て当初の長崎

二　研究の方法と用語の整理

（一）研究の方法

幸い、長崎の地形や港の位置の復元について機は熟している。近年、国土交通省国土地理院は、地形図、写真、標高、地形分類、災害情報など、幅広い内容で入手しやすくウェブ地図で公表している。また、江戸時代の長崎の海岸線や町割については、明和年間（一七六四～七二）に製作された「長崎惣町絵図」と現代の縮尺二五〇〇分の一地形図を重ね合わせた復元図という労作がある（布袋厚二〇〇九）。

これらの情報とともに、考古学的な発掘調査による遺跡の情報を組み合わせることで、町建て当初から近世初期までの、長崎の地形や港の位置を復元して変化の有無を確かめたい。

もちろん、上記の作業だけで全ては解決しない。文献資料や他の絵画資料などの情報も加えて総合的に考察を行う。[4]

（二）用語の整理

考察の前に、ここで用語の整理を行いたい。本稿で扱う、港をもつ都市のことを、一般に「港町」と呼びたいところであるが、安野眞幸は港町を、貿易港と漁港に分け、前者の機能が高いものを「港市」とした（前掲一九九二）。これらの都市を一番多く分析している建築史の分野においても、港町には、港町と漁村の別があるという（岡本哲志二〇一〇）。ほかにも、港町に河川氾濫原の寺内町などを含めて「水辺都市」（伊藤毅二〇〇五）、河川交通を念頭に置き「水都」（陣内秀信二〇一三）などの用語もある。しかし、これらの言葉はいずれも特殊なうえ、本稿が対象とする、海に面することが自明な都市にはそぐわない。そこで、より一般的かつ特定の意味を帯びていない、「港湾都市」の名称を用いることとする。[5]

また、港において荷や人の乗降機能を果たす、堤そのほかの施設を「波止」と呼ぶ。一六〇三年に日本イエズス会が刊行した長崎版『日葡辞書』に、〝Fato〟の語があり、意味は「ハト（波止）波止場、あるいは下船するのに適した場所。下（しも）の語」とされており、当時の長崎及び九州に最も適しているからである（土井忠生他編訳一九八〇）。

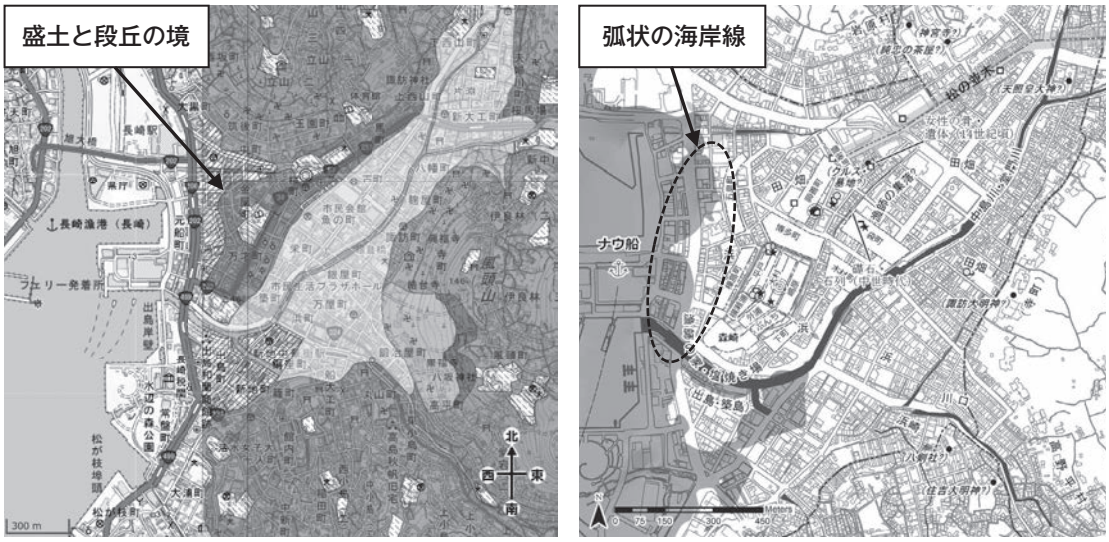
三　考察

（一）地形の復元

地形の復元には、当時の標高データも大事であるが、地質がもたらす土地条件も同じく必要と考える。人間は標高のみで居住するのではなく、地質・土壌も加味していると想定できるからである（松田博幸一九八八）。そこで、国土地理院作成の「数値地図二五〇〇〇」の「沿岸海域土地条件図（平成元年以降）」を利用して、[6] ヴィエイラ・アマロが作成した一六〇〇年前後の長崎の地形復元図と対照したい（図2、3）。

数値地図二五〇〇〇のデータで注目したいのは、旧六町や金屋町、桜町を西辺とし、旧、地獄川との境を東辺とする地形が「更新世段丘」に相当し、段丘と海の間に位置する旧、樺島町や浦五島町、本五島町のほとんどが約二m以上の「高い盛土地」に相当することである。なお、この段丘と盛土の境は標高四m[7]の等高線に対応する。

ヴィエイラ・アマロは、満潮時の地形について「長崎湾の復元図」と図題を付け、干潮時の地形について「考古学的発掘調査によって



凡例
最も濃い網点：「更新世段丘」
斜線：「高い盛土地」

凡例
最も濃い網点：「河川」
網点：「海水（干潮時）」

※両図の縮尺は任意

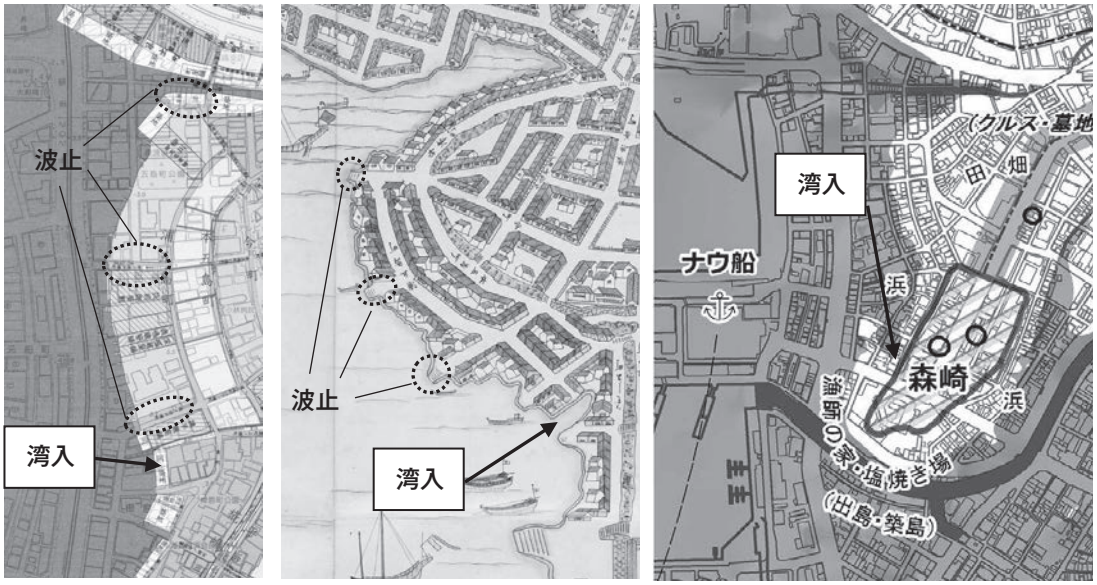
図２　「沿岸地域土地条件図」（左）と「1600 年前後の長崎の地形復元図」（右）
（図面の一部に図形を入れて加工）

発見された遺物の分布図」と題している。また、後者の図に町割を描いていることを併せて推察すると、基本的には干潮時の海岸線に人の土地利用があり、満潮時の浸水の影響を加えて考慮して図示したようである。

ここで注目したいのは、干潮時の海岸線が旧、五島町のカーブに対し双曲線をなすように弧を描き、当時の五島町から樺島町にかけて突状の浜地をなしていることである（図２）。この浜地は艀を寄せて着底するのに都合よく、そして湾入部分は風波から船を守るのに役立つ。また、先にも触れたが、満潮時の海岸線は、樺島町に大きく湾入し突堤が生じる（図３右）。これら特徴ある地形は人工的に利用されたのではないか。

この推測を補強する歴史資料として絵図を参照したい。現在知り得るなかで、最も古い長崎の絵図として「寛永長崎港図」（長崎歴史文化博物館所蔵）がよく知られている。しかし、本図の海岸線は全体的に緩く描画されており、省略がはたらいている。後出する図として「寛永年間長崎之図」（同館所蔵）があり、これと同系の絵図に「長崎港之圖」（立正大学図書館田中啓爾文庫貴重資料）がある[8]。これを確認すると、海岸線に雁木が描かれた突堤すなわち波止が、浦五島町に三箇所、大波止の位置に一箇所描かれる。また、浦五島町側の波止の間は凹凸が目立ち、波打ち際を想起させる（図３中）。

そして、布袋厚の作成した復元図を改めて参照すると、浦五島町の小路に「中ノ波戸横町」「南ノ波戸横町」の文字が見える[9]（図３左）。すなわち、この横町と化した小路が旧波止であると推定できよう。なお、波止自体は埋立てによりほぼ埋没したが、雁木が存在して乗降機能は残ったことがわかる。また、「北の波止」は文字が



左：布袋厚2009より　一部に図形を入れて加工
中：「長崎港之圖」（立正大学図書館所蔵）より　一部に図形を入れて加工
右：ヴィエイラ・アマロ2016より　一部に図形を入れて加工

※縮尺は任意

図３　３つの波止と、最初の大波止（湾入部）

書かれていないが、類推すれば船津町と浦五島町の間の築地により埋没した、海岸側の小路が該当するであろう。

また、長崎湾の復元図とは方向が異なるが、樺島町に大きく湾入と突堤が描かれる。突堤は、一五八三～八八年にゴアに滞在したリンスホーテンの記録に書かれ、一六一九年の情景を描いた絵画資料にも描かれているとヴィエイラ・アマロが指摘した「小岬」に対応する（前掲二〇一六）。そして小岬の北側の湾入には、船・ジャンク船が停泊する。筆者はこれを最初の大波止と考える。

（二）海岸の復元

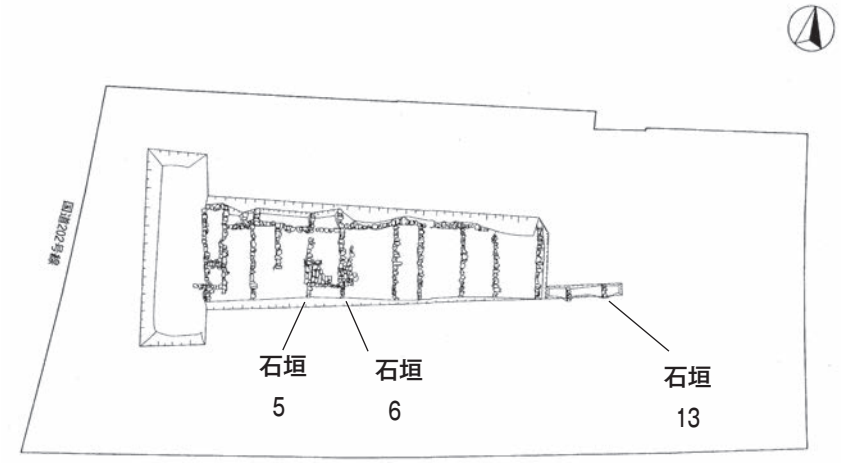
五島町遺跡の調査から

浦五島町の発掘調査事例については、現在一箇所だけある。当地は佐賀藩深堀領と同鹿島支藩の屋敷が所在し、それ以前の所有者・居住者は不明である。調査の結果、江戸時代の海岸護岸の石垣が計一三面出土した。埋立てによる陸地の拡張に伴い、海側へ石垣が築かれたことがわかる（長崎市埋蔵文化財調査協議会二〇〇一）。

この調査では、含まれた遺物（陶磁器）の年代観から、「石垣5」から「石垣13」を覆っていた焼土が、寛文三年（一六六三）の大火の整理土層であると明らかにされた。したがって、石垣5より内側（陸側）の石垣は寛文三年以前の海岸線である。そこで、布袋厚の復元図に調査図面を重ねると、当時の海岸線が浦五島町にかなり入り込むことがわかる（図4）。調査範囲の限界から本五島町まで石垣は確認できないが、前節で述べた段丘と盛土の境が当初の海岸線であり、浦五島町は埋立てによって後世に築かれたと推定できよう。

更に敷衍すると、先述した南の波止以南の、樺島町側への湾入の範囲も推測できる。南の波止に南接する諫早領屋敷は築地＝埋立て

布袋厚2009を50％
縮小して加工



石垣５の立面写真と階段部分（上から）

図４　五島町遺跡の位置（左）と発掘調査の概要図（右、縮尺1：400）

地であることが知られている。かつ、現在の樺島町公園付近の標高は二・八ｍ前後であり、ここも町建て当初は海に没したであろう。そのため、旧、樺島町を設ける余地は町建て当初になく、段丘と盛土の境、すなわち平戸町との境において海は隔てられ、旧、六町の西岸は切り立った崖であったと推定する。なお、地形上からは、旧、江戸町は海に没することはないが、六町の町建て時まで遡る資料に欠けることから、町の成立は既往の説のとおり、一七世紀初頭頃と考えるのが妥当であろう。

また、石垣5と6については、幅約一・八ｍの石段が天端に設けられており、石垣に波止が伸びているのではなく、雁木が作りつけられたのでもない。一七世紀後半以後、直線的な石垣が海に面する護岸景観に変じたと推測する。

大波止の位置について

宝暦一〇年（一七六〇）に田辺茂啓によって完成された『長崎実録大成』によると、大波止は、文禄（一五九三～九六）頃から船着きの波止場に定められたという。一七世紀第４四半期に三回埋立てにより広場部分を拡張整備した。同書所載の図によると、海に接する広場の西辺に雁木を設けており、「入江」は長三間二尺（約六・五ｍ）、幅五間三尺（約一〇・七五ｍ）となった。そして「此所風波之節御用船等引入可繋置用意也」と用途の説明がなされている（丹羽漢吉・森永種夫校訂一九七三）。

上記をみると、文禄以前の町建て当初から、当地が波止場であったとは必ずしも言い切れない。長崎奉行所西役所が設置されたのが延宝元年（一六七三）であり、この施設と一体となって公的な船着き場として成長したと考えるのが妥当である。

ほかに遡り得る伝承としては、寛永一一年（一六三四）に「長崎

くんち」の御旅所に定められたこと、同一四から一五年（一六三七、三八）の島原天草一揆に伴い「鉄砲玉」が置かれたことなどもあるが、やはり町建て当初に遡って、当地に波止が設置された根拠にはならない。

そこで、先述したように、一五八〇～一六二〇年代の樺島町の湾入部分は元々の海岸地形を保っており、更に遡って、町建て当初から旧、大波止は現在よりも北側の樺島町に存在したと推測する。この旧、大波止から上陸すると、最も近接する道は旧六町のうち横瀬浦町と平戸町の間の道、すなわち旧六町を、平戸・大村・島原／横瀬浦・外浦・ぶんち、の南北に分割する、東西軸に相当するのである。

（三）町建て当初の都市軸線について

都市軸線の話題に入ったため、本節では関連する遺跡として、万才町遺跡（旧県庁新別館地点）の成果をみたい。調査地は大村町及び平戸町に属する。町建て当初に相当する地層は「地山層」（長崎火山岩の風化土で構成され、土地条件図の「更新世段丘」に相当する。明るい黄褐色あるいは橙褐色を呈する粘質土）と呼ばれる。調査時、最も下の地面であるから、異なる研究者間においても理解の共有がしやすい。

当遺跡では、地山層に構築し、慶長六年（一六〇一）の火災の整理土層で覆われる遺構を「第1期」（一五七〇年代～一六〇〇年代）、火災後の遺構を「第2期」（一六〇〇年代～三〇年代）として遺構の配置が考察されている（川口前掲二〇〇四、宮崎前掲二〇二〇a）。ここでは、宮崎貴夫の大村町の遺構配置図を参照する。[10]

川口、宮崎は、第1期の掘立柱建物（SB8）が大村町の通りに平行しており、三間×七間の総柱礎石建物（SB7）は敷地西側の奥まった位置にあることから、前者を通りに面した店舗や住居、後者は蔵と推定している。この説を採用すると、おそらく平戸町と大村町の境をなしたと推測する溝（SD8）に区切られた東側の敷地は一箇所にまとまり、角地の利用として些か広い。また、SB7が総柱かと言うと、出土状況図からみると説得力はそれほど強くない。礎石建物の内部に束柱が立つと理解しても良いように感じる。それから、敷地入口が東側の街路であった場合、SB8は平入建物となる可能性が高いが、当該期の町屋建物が平入かどうか疑問である（大場修二〇〇一）。

以上のことから、SB7とSB8は異なる敷地の建物であり、南側の通りに向けて入口を開いたと考えてはどうか。そして、南側の

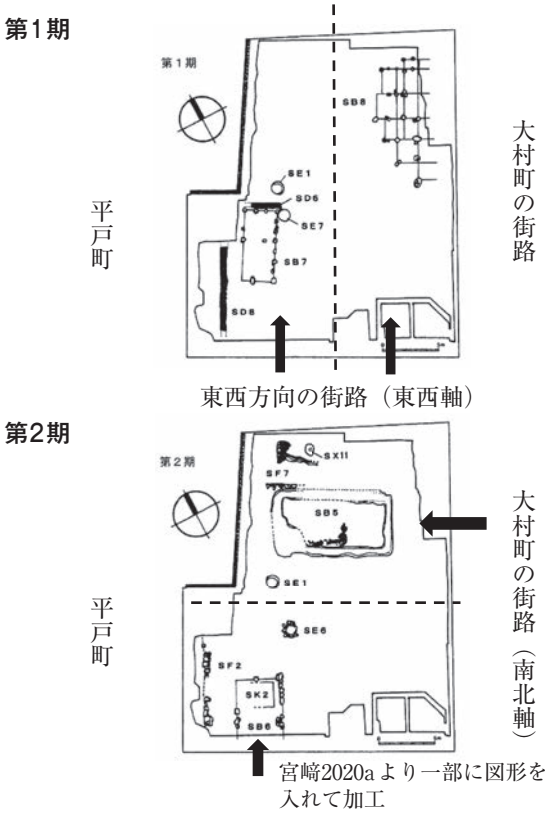


図5　大村町の敷地割の変化（縮尺1：500）

通りは前節最後に論じた「東西軸」に相当する。したがって、町建て当初の当該地点は旧、大波止からの上陸ルートに面しており、かつ大村町の街路と交差する角地であったと復元する。

第2期に入ると、SB8のあった地点の近辺は、東西方向に主軸をもつ布基礎建物SB5が建ち、SB7のあった近辺は南北方向に主軸をもつSB6が建つ。このとき、SB5は大村町の街路に、SB6の建った敷地は「東西軸」の通りに面している。すなわち、角地の敷地が南北と東西の二方向に変化したとみることができる。東西軸とともに大村町の「南北軸」が重要となったと理解する。

（四）小堀の検討

長崎の旧記類の一つ『長崎拾芥』には、豊臣公領期の文禄元年（一五九二）に堀町の場所に「小堀」が掘られたと記載される。この小堀と推定される堀跡が、金屋町遺跡の発掘調査で発見されている。当地は、今町の一角に属するため堀町とは少し離れるが、堀町の延長線上に位置しており、確認した延長距離で約七m分、幅四.八～五.〇m、深さ約二mを測り、堀として十分な規模を示している。覆土は六層に分かれるが、最下層の六層からは一六世紀末から一七世紀初頭の中国景徳鎮産の磁器碗、皿や日本の瓦質土器甕などが出土した。このことから、報告者は一七世紀第1四半期頃にはこの遺構が埋め立てられ廃絶したと推定している（長崎市埋蔵文化財調査協議会二〇〇七）。

筆者も報告者の見解に首肯する。また、発掘調査報告書には出土した堀遺構と堀町を結んだ推定ラインが復元されており、東端は「想像たくましくすれば、台地裾を流れる地獄川に接続していた可能性もあろう」とし、「道路を挟んだ向かいの敷地を通過して崖への到達をもって西端となるものと想定される」とやや控えめに表現されているが、筆者はこの小堀が船津町側の入江から地獄川までを繋いだと推定する。土地条件図や等高線から船津町側の入江は大きく開口していたと推定でき、その奥部の小川町と旧、恵美須町の間には「波戸道」という表記が見えるからである。[11]

小堀とともに島原町と本博多町の境を掘った「大堀」は、旧、大波止に繋がっており、[12]東側も地獄川まで連続していた可能性がある。したがって、豊臣公領期に本博多町に設けられた奉行所は、南北を大きな堀で区画していたと復元できる。奉行所からは（浦）五島町の北、中、南の3つの波止を睥睨でき、今町を通れば船津町の波止へも通ずることができる。

四　港湾都市長崎の変化と画期

最後に、前節の復元から導き出した、港湾都市長崎の変化を述べたい。

まず、当初は、旧六町とイエズス教会が岬の先端の段丘上に建てられる。このとき、東・南・西の海岸は切り立った崖地形をなす。崖下の西岸には、天然に形成した風波を避ける小さな岬と湾入する船着き場、（旧）大波止がある。船着き場から東へ街路が伸び、六町すべての街路と交差する。このように、船着き場から内陸に向かう街道に沿ってタテ町型の町割をなすのは、宮本雅明が提唱した中世起源の港町「日本型港町」の様態を示すものである。また、直行する大村町の街路は、イエズス会教会から長崎氏領へ至る陸上交通の要路といえよう（図6）。

傍証として、当該期の大村氏の本拠である三城城下町を挙げたい。

※布袋厚2009を80％縮小して加筆

なお、豊臣公領期（前期）の長崎の範囲については、実線及び細かい点線（推定線）で示している。

図６　町建て期（元亀２年から天正８年、1571 ～ 80）の長崎と
豊臣公領期（前期：文禄元年から慶長元年、1592 ～ 96）の長崎

家臣団の居住地が間に入るので、長崎とは直接の比較は難しいものの、領主の居城と港との関係をみると、町屋群は近世以前の港である杭出津の海岸線から直交して、渡河して三城城へ至る街路と直角に交わる。先の宮本雅明の理解と対応すると大野安生は評価している（大野二〇〇九）。

つぎに、天正八年（一五八〇）に始まる教会領の時期に、六町の周囲に本博多町、樺島町、本五島町、内下町が形成される。内下町を除く三町が地名を由来としており、通説通り、迫害されたキリシタンが居住したであろう。竜造寺氏が有馬氏を降すのは天正六年（一五七八）であり（川副博二〇〇六）、キリシタン大名の大村・有馬には政治的不利な状況があった。

そして、天正一六年（一五八八）の豊臣秀吉による直轄領化により、町は大きく変化する。文禄元年（一五九二）の本博多町への奉行所設置、南北二本の「大堀」「小堀」の開削、そして浦五島町の北、中、南三箇所の波止の構築である。このとき、町の平面形が海岸側に広く発達し、若干いびつな様態をなすのは、船津まで続いて船着き場を大きく開発したためと推測する。なお、このときの波止は、自然地形を利用して突堤を長く伸ばす一方で、石垣を築いて陸地を拡張することで、海からの浸水を遮る形状をなしたと復元する（図6）。

船津は、越中哲也が正しく指摘する通り、桜馬場の長崎氏本拠へ通じる港であろう（前掲一九八四）。北側に「上・中・下」の町名が残るのも、岬側の長崎とは別に、もう一つの「長崎氏の町・長崎」が存在したからと考えるのが自然である。二つの港が近接する傍証としては、長崎の前に一五六二、六三年にポルトガル船の寄港地であった横瀬浦をみたい（パチェコ・ディエゴ前掲）。当地の構造については教会や十字架の位置に考慮の余地が残されているものの（ヴィエイラ・アマロ二〇一四）、東港に領主である大村純忠の屋敷、西港に「上町」「下町」を含むキリスト教会が配置された点に異論はない。桜馬場から船津に至る長崎氏が所管する港と、イエズス会との関わりによって開かれた港の両者が併存したのと同じ構図とみてよいであろう。

続いて、慶長元年（一五九六）、豊後町と旧、桜町の間、そして旧、桜町と旧、勝山町の間に堀を設ける。また、同五年（一六〇〇）には内町・外町の境として後者の堀を東西方向へ延長する。このことにより船津から地獄川まで貫通した堀が再度廻る。この頃には地獄川と中島川に挟まれた中州の南岸の酒屋町、袋町、本紺屋町、材木町が築かれ（『長崎志正編』によれば慶長二年〈一五九七〉）、埋立てにより形成した旧、築町も内町に編成される（『増補長崎略史』によれば慶長五年〈一六〇〇〉）。豊臣公領の再拡張が行われたと理解できよう。

最終的に、船津が属する外町部分と、大波止等四つの波止が属する内町部分が統合され、「二つの長崎」が一つの町になるのは、大村氏が長崎領を替地して、長崎の外町部分も含めて徳川公領となる慶長一〇年（一六〇五）年（古賀十二郎一九五七）と位置づけてよいであろう。やがて、海岸の埋立ては進み、埋立てる海が深くなることで波止への乗降は、石段や雁木を用いたものとなる。五島町遺跡の事例や「長崎惣町絵図」『長崎実録大成』でみたように、護岸石垣に遮水され凹凸の少ない海岸線と、突堤の小さな広場状の大波止が出現する。厳密な年代を特定することは現時点では困難であるが、遅くとも、長崎奉行所が本博多町から外浦町に移され、公的な船の乗降場所がよく知られる大波止となる、寛永一二年（一六三五）

以後であろう。この前年には出島の築造がなされ、江戸町一帯の海岸整備を想定するからである。

おわりに

紙幅の関係もあり性急に述べた感も否めないが、本稿の目的は一定果たせたので擱筆したい。まとめると、長崎の町は、当初イエズス会（ポルトガル人）の着船の都合や、高台を好む地形的条件などを基礎としつつ、都市プランは日本的なものであったといえる。そして、新興地の港（六町から開始する長崎）と、既存の港（長崎氏の治める長崎）の「二つの長崎」を経て、「一つの長崎」へと統合された。とくに都市改造としての大きな画期として、長大な波止の構築を伴う港の拡大や、長大な堀の掘削を伴って、都市域を2回拡張した豊臣公領期が注目できよう。

これらの変化は、地形や港の復元、発掘調査で確認した遺構などから検証することができ、今までより説得的であると考える。今後の課題としては、港や諸施設あるいは船の正確な形状や規模、当時の海岸線の確認など、より実際の資料に即した研究などが残されているが、純粋な興味関心によって、市街地に埋没する遺跡を調査するのは容易ではない。本稿の素材となった考古学的な発掘調査の成果も、各種土木開発に際しての調整として、行政機関が緊急発掘調査を行った記録の所産である。

しかし、「掘っていないからわからない」「掘ればわかる」のではなく、「掘っていない部分はどう考えられる」のかと考察するのが都市考古学の本領である（前川要一九九一）。実際、大坂や堺などの近世都市遺跡の様態についても、より具体的に研究がなされている[13]（松尾信裕二〇一四、二〇一七）。

そして最終的には、本稿が目的とした、実際の資料を基にした作業を踏まえて、安野眞幸が述べたような人間と交易、あるいは都市との関係が改めて論じられるべきであろう（前掲一九九二、仁木宏一九九七、仁木宏、綿貫友子編二〇一五）。港湾や都市、遺跡についての外貌を表面的にのみ理解したのでは、歴史の研究は虚しい。

本稿の作成においては、株式会社長崎文献社、立正大学図書館のご厚誼を得た。末文ですが、記して感謝申し上げます。

（長崎市文化財課主事）

〔付記〕

脱稿後、林一馬二〇〇四「港市・長崎の形成過程と都市構造」『長崎総合科学大学紀要』第四五巻第一号に接した。安野眞幸『港市論』の問題点を事実関係から鋭く指摘しており、知らずと拙論が重複して述べてしまった部分もあった。不明をお詫びしたい。ただし、林論文は文献と地理に依拠しており、考古学的情報には触れていない。また、発達過程時の長崎の地形に関して、拙論とは見解が全く異なることを付記しておきたい。

引用参考文献

ヴィエイラ・ビベオ・アマロ　二〇一四「港市横瀬浦の都市史―キリシタン集落と教会を中心に―」都市史学会編『都市史研究』一　山川出版社

二〇一六「港市長崎の成立に関する研究」『建築史学』第六七号　建築史学会

安野眞幸　一九七四「中世都市長崎の研究」『日本歴史』三一〇号

一九九二『港市論』日本エディタースクール出版部

市村高男　一九九六「中世後期の津・湊と地域社会」中世都市研究会編『津・泊・宿』中世都市研究三　新人物往来社

越中勇　一九八八「寛永年間長崎之図」長崎県の郷土史料編纂委員会編『長崎県の郷土史料』長崎県立長崎図書館

越中哲也　一九八四「初期　長崎の町の成立」『英米文化研究』創刊号　純心女子短期大学

大野安生　二〇〇九「肥前大村の成立過程」別府大学文化財研究所、九州考古学会・大分県考古学会編『キリシタン大名の考古学』思文閣出版

大場修　二〇〇一「平入志向の町屋形成―近世町屋の在来形成と新興形式　前編―」『建築史学』第三七巻　建築史学会

大庭康時　二〇二〇「港湾都市博多」大庭康時他編『九州の中世Ⅰ島嶼と海の世界』高志書院

岡本哲志　二〇一〇『港町のかたち―その形成と変容』法政大学出版局

鎌田泰彦、松岡数充、近藤秀三　一九八二「四・一・地質的条件からみた災害の特性」長崎大学七・二三長崎豪雨災害学術調査団編『昭和五七年七月長崎豪雨による災害の調査報告書』

川口洋平　二〇〇〇「一括資料からみた長崎遺跡群」『西海考古』第二号　西海考古同人会

二〇〇四「中世の長崎―開港前後の町・人・モノ―」大庭康時他編（中世都市研究会編集協力）『港湾都市と対外貿易』中世都市研究一〇　新人物往来社

川副博（川副義教校訂）二〇〇六『竜造寺隆信：五州二島の太守』佐賀新聞社

古賀十二郎　一九五七『長崎開港史』古賀十二郎翁遺稿刊行会

小林英之　一九八八「防災・長崎・歴史」稲垣榮三先生還暦記念論集刊行会編『建築史論叢』中央公論美術

坂井隆　一九九五「東南アジアと日本の中近世都市―図化資料から見た港市の防衛と機能―」『日本考古学』第二号　日本考古学協会

陣内秀信、高村雅彦編　二〇一三『水都学Ⅰ』法政大学出版局

外山幹夫　二〇一一「第三章　戦国期の長崎　第3部　肥前国彼杵郡」『中世長崎の基礎的研究』思文閣出版

土井忠生他編訳　一九八〇『邦訳日葡辞書』岩波書店

長崎県教育委員会　一九九五『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第一二三集

二〇〇七『万才町遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第一九二集

長崎市埋蔵文化財調査協議会　二〇〇一『五島町遺跡』

二〇〇七『金屋町遺跡』―長崎市金屋町六番四号、五号におけるマンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

書―
中村質　一九六七「初期長崎絵図に関する書誌的考察」『日本歴史』二三五号　日本歴史学会
仁木宏　一九九七『空間・公・共同体』青木書店
仁木宏、綿貫友子編　二〇一五『中世日本海の流通と港町』清文堂
丹羽漢吉・森永種夫校訂　一九七三「第二巻目録　御役所諸御番所等造営之部　一大波戸之事」『長崎実録大成』正編　長崎文献社
パチェコ・ディエゴ（結城了悟）、佐久間正訳　一九六九『長崎を開いた人―コスメ・デ・トーレスの生涯―』中央出版社
布袋厚　二〇〇九『復元！江戸時代の長崎』長崎文献社
松尾信裕　二〇一四「近世城下町大坂の誕生と拡大」『大阪上町台地の総合的研究―東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型―』公益財団法人　大阪市博物館協会大阪文化財研究所、大阪歴史博物館
二〇一七「近世初頭の都市における町人地の形態と内部構造―堺環濠都市の改造に見る中世都市から近世都市への変容―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇四集
松田博幸　一九八八「三．土地条件図ができるまで」『季刊防災科学』No.012　一般財団法人消防防災科学センター
宮崎貴夫　二〇二〇a「長崎市万才町遺跡の再検討」『長崎県立埋蔵文化財センター研究紀要』第一〇号
二〇二〇b「万才町遺跡の発掘から見えてきたこと」片峰茂監修『長崎の岬Ⅱ―長崎の記憶をほりおこす』第二回「長崎県庁跡地遺構を考える会」シンポジウム報告書　長崎文献社
宮本雅明　二〇〇六「日本型港町の成立と展開」歴史学研究会編（深沢克己責任編）『港町のトポグラフィ』シリーズ港町の世界史二　青木書店
山崎信二　二〇一五『長崎キリシタン史―附考　キリスト教会の瓦』雄山閣

注

1 「地理学的な見地」と書きたいところであるが、筆者には地理学の素養がないので、このように記す。

2 当時の日本で知られた事柄については和暦（西暦）、外国の文書資料で知られた事柄や、日本での太陽暦導入以降の記述については西暦のみ表記することとする。

3 研究史として蛇足となるので注に挙げたが、この「市民社会」の姿を長崎に仮託したといえる。長崎を「港市」というユニークな存在として描写するのと併せて、安野の所論の大きな二本柱であると思う。

4 方法論はヴィエイラ・アマロや川口洋平の所論と同様であるが、ヴィエイラ・アマロは文献史と地形のデータに重点を置くなか、考古学的調査のデータについて一六〇〇年代当時の地面の標高値と、外山幹夫も注目した墓域を参照するにとどまり、集落遺構の内容には踏み込めていない。そのため、川口や宮﨑貴夫が詳述した万才町遺跡（旧県庁新別館地点）の成果は鑑みられていない。一方、川口の論考は、万才町を対象にしたものが多いことも関係して地形への論及は少ない。

5 安野眞幸は「近代的なイメージが強い」とするが（前掲一九九二）、市村高男は中世の津・湊を一般的に述べる際「港湾都市」の語を用いている（市村一九九六）。また、二〇〇三年の中世都市研究会第一一回研究集会の成果は『港湾都市と対外交易』という図書にまとまった。同書の編集に名を連ねた大庭康時は、その後の研究においても博多を「港湾都市」と表現している（大庭二〇二〇）。近年の文献史学・考古学の動向を見るかぎり、そのような心配はないと感じる。

6 なお、縮尺二万五千分の一のレベルが実データであるが、ヴィエイラ・アマロも同標高データを利用しており、作成した図面は同程度の精度と推測する。また、国道二〇二・二〇六・四九九号線以西のデータが未作成のようであるが、本論には大きな影響は出ないので、そのまま東側のデータのみ利用して論じている。地図の詳細は以下のURLを参照されたい。
国土交通省国土地理院HP　https://www.gsi.go.jp/top.html
（二〇二一年一一月現在）

7 正確には、四m強である。少なくとも五mには達しない。このことは長崎大学学術調査団による中島川流域の標高でも明らかにされている（鎌田他一九八二）。

8 「寛永年間長崎之図」は明治三一年（一八九八）の模写である。町名の内容からは、ほぼ正保（一六四五～四八）から明暦（一六五五～五八）頃に合致するが、領界線は明暦三年から寛文八年（一六五七～六八）の内容を含むため、原図は寛文八年以降の作成と推定されている。古賀十二郎は「正保年間長崎之図」が妥当ではないかと提示したという（中村質一九六七、越中勇一九八八）。
なお、「長崎港之圖」がこの系統に属することは、長崎市長崎学研究所長　赤瀬浩氏のご教示による。記して感謝申し上げる。

9 岩﨑義則によると、天明末年～文化五年（一七八〇年代後半～一八〇八年）に描いたと推定される「浦五嶋町ヶ所数間数」（長崎歴史文化博物館所蔵）に同様の情報が記されている（長崎市埋蔵文化財調査協議会二〇〇一）。なお、「波戸」の用字については

原文どおり表記した。

10 最下層である地山にある遺構は、後世の土木作業、つまり上の地層に生活していた人々の掘削を受けることが多い。当地点の調査では、平戸町には第1期の遺構の残存が少なく、大村町に遺構の確認が多かったようである。そのため、大村町の考察に依拠することとする。

また、正確には、宮崎の言う第1期を川口は「開港～大村領期」、「豊臣公領期」のように権力主体の変遷に応じて細分しているが、同一の遺構が両期にまたがって存続することも述べているので（例えば掘立柱建物SB8）、本稿においては宮崎の「第1期」「第2期」に概括することとする。

11 筆者は原典を読めていないが、布袋厚の作成した凡例によると、「長崎諸役所絵図」「長崎諸地図」「正徳年間町絵図」「永昌寺より本蓮寺まで絵図」などから得た情報のようである。

12 現在も五島町と樺島町の境を流れる小川として、一部残存している。

13 松尾信裕は、大坂城下町の近世化を跡付けており、天正一一年（一五八六）の大坂城及び城下町の建設時に、豊臣秀吉が港湾機能をもつ既存の都市を自らの城下町に取り込んだと述べている（前掲二〇一四）。また、堺について、慶長二〇年（一六一五）以前は地形条件を克服することができず、徳川公領期の元和年間（一六一五～二三）に都市改造が行われ、従来知られる整然とした町割りを備えたことを述べている（前掲二〇一七）。長崎の研究にとっても、非常に傾聴すべきである。